



社会的つながりがもたらす高齢者の学びと発達

三浦, 知陽

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2024-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8807号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490032>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏 名 三浦 知陽
専 攻 人間発達専攻
指導教員氏名 片桐 恵子

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

社会的つながりがもたらす高齢者の学びと発達

論文要旨

超高齢社会となった現在、日本人の健康寿命は延伸しており世界でトップである。世界一長くなった高齢期であるが、過ごし方に惑う高齢者も多い。高齢期の過ごし方の選択肢としては、地域活動やボランティア等の社会参加活動がこれまで主であったが、近年は就労する高齢者も増加している。社会参加活動と就労は、少子化による地域や社会における人材不足等、超高齢社会の課題解消においても期待されている。

社会老年学では、これまで社会参加活動と就労は個別に扱われて検討されてきた。しかし高齢者にとっては、社会参加活動も就労も高齢期の過ごし方の一つという点においては同じである。本論では、高齢者の社会参加活動と就労を高齢期の過ごし方として捉え、2つ合わせて社会活動とよぶ。

高齢者の社会活動がもたらすものとして、社会老年学では心身の健康等が検討されているが(片桐, 2012)、他に学びや発達ももたらされることが指摘されている(堀, 2010)。また社会活動を行うことによってもたらされる人とのつながりも、学びや発達に重要であることが指摘されている(岡本, 1997; 上田・中原, 2013)。社会活動をとおした人とのつながりは社会老年学のトピックの一つであるが、人とのつながりがもたらすとされている学びや発達は、これまで社会老年学においてあまり注目されてこなかった。

本論では、高齢者の社会活動をとおした人とのつながりと学び、発達について検討することを目的とする。本論の構成は2部からなる。

第1部 高齢者の社会的つながりに関する社会的、理論的背景

第1部では、本論で取り上げる高齢者の社会活動、学び、発達に関する社会的、理論的背景について述べ、本論で検討する発達プロセスモデルについて提案する。

第1章 超高齢社会における高齢者の社会的つながりの現状と課題

本章、第1節では、現代の高齢者を取りまく環境の変化と、社会とのつながり方の変化について「社会参画(片桐, 2017)」という新しい捉え方を紹介する。

第2節では、社会活動の現状について述べ、第3節では高齢者の社会活動の効果について述べる。社会活動の効果について、社会老年学でこれまで検討されてこなかった、人とのつながり

がもたらす学びと発達について先行研究から論じる。最後に社会活動の効果に関する研究の課題として、1. 社会にもたらす効果という視点の不足と、2. 人とのつながりがもたらす学びと発達に関する検討の不足について指摘する。

第2章 高齢者の「社会活動をとおした学び」

本章では、高齢者の社会活動における学びについて、生涯学習に関する先行研究から述べる。

第1節と第2節では学びの分類について紹介する。本論では高齢者の社会活動の学びの中心になると考えられる、経験から生じる偶発的な学びである、インシデンタルラーニングに注目する。インシデンタルラーニングは、これまでの長い高齢者の経験が生かせる学びである。本論では、高齢者の社会活動をとおしたインシデンタルラーニングを、「社会活動をとおした学び」と呼ぶ。本節では「社会活動をとおした学び」に関する分類を試み、「社会活動をとおした学び」における人とのつながりがもたらす学びの重要性について指摘する。また、「社会活動をとおした学び」における人とのつながりがもたらす学びを、本論における学びの定義とし、「つながりからの学び」と呼ぶ。

第3節で、高齢者の学びに関する研究上の課題として、1. 「社会活動をとおした学び」の検討、2. 活動継続における「社会活動をとおした学び」の検討、3. 「つながりからの学び」がもたらす発達に関する実証的検討の3つの不足について指摘する。

第3章 社会活動をとおした高齢者の発達

本章では、これまでの生涯発達論から、本論で扱う発達について論じる。

第1節で、生涯発達論から高齢者の発達が考えられる発達論について述べる。

第2節では高齢者の社会活動に関連する発達について述べる。近年注目が高まる、「世代性 (Erikson, 1950)」と「アイデンティティ (岡本, 1995)」について述べ、社会活動との関連を検討した先行研究をまとめる。

第3節では、先行研究から研究上の課題を二つ指摘する。一つは発達につながる学びの検討と、二つ目は社会から求められる高齢者の発達の検討の不足である。

第4節では、上記二つ目の課題である社会に求められる高齢者の発達という点を踏まえ、本論における発達の定義について述べる。第2節で取り上げた、「世代性」と「アイデンティティ」は、個人の人格形成に関連する発達とされていることから個人内の発達と捉え、本論では「個人的側面」の発達として扱う。また社会にもたらす効果として、「社会貢献意識」と、地域づくりとの関連が指摘されている「コミュニティ感覚」を取り上げ、「社会的側面」の発達として扱う。本論における発達は、「個人的側面」と「社会的側面」の二つを合わせた発達と定義する。

第2部 「社会活動をとおした発達のプロセス (仮説モデル)」の検証

第2部では、第1部で検討した先行研究を踏まえ「社会活動をとおした発達のプロセス (仮説モデル)」を設定した。「社会活動をとおした発達のプロセス (仮説モデル)」は、高齢者が社会活動をとおして得た「人とのつながり」をとおして、「つながりからの学び」が生じ、「つながりからの学び」によって高齢者の発達がもたらされるという、社会活動によってもたらされるつながり、学び、発達を一連のプロセスと捉えたモデルである。仮説モデルの検証に際し、「人とのつながり」、「つながりからの学び」、発達の関係を明らかにする。本研究では、3つの検討課題を設定した。1. 「社会活動をとおした学び」とはどのようなものか、2. 社会活動は「個人的側面」、「社会的側面」の発達につながるか、3. 「つながりからの学び」

は発達に影響するかの3つである。

第5章 「社会活動をとおした学び」の検討【研究1】

本章では、「社会活動をとおした学び」について検討する。

第1節では、高齢者大学、絵画教室、生きがい就労を対象に、60歳以上の参加者22人を対象にしたインタビュー調査のデータ（男性7人、女性15人）を使用する。分析テーマを「活動をとおした認識と考え方の変化」と設定し、「社会活動をとおした学び」の検討と活動の種類による違いを比較検討した。その結果、「社会活動をとおした学び」は、「自己に関する認識」と活動や仲間、情報といった自己以外の「環境に関する認識」の2つのカテゴリーが析出された。また活動の種類によって「社会活動をとおした学び」には違いがあり、活動の目的、活動の継続期間、つながる人の年齢層の違いが影響することが見いだされた。

第2節では、活動継続による「社会活動をとおした学び」の変化について検討した。その結果、活動継続によって「社会活動をとおした学び」は、深化することが示唆された。自己から他者に関する認識の変化から社会的課題への気づき等、社会に関する認識へとつながっていたことが捉えられた。

第3節では、【研究1】の結果をまとめる。活動における人とのつながりは、共に協力し合った仲間や、時間をかけて関係を築いた友人等の強いつながりと、挨拶程度の弱いつながりの2種類あることが明らかになった。本論では、強いつながりを「仲間の獲得」、弱いつながりを「交流の広がり」と定義した。「仲間の獲得」からの認識の変化は「交流の広がり」よりも、「つながりからの学び」をより促進する可能性も示唆された。

第6章 社会活動をとおした高齢者の発達の検討【研究2】【研究3】

本章では、社会活動をとおした発達について質的調査と量的調査から検討する。

第1節では、これまで検討が少なかった就労をとおした高齢者の発達について、3か月の生きがい就労の参加者（ $n = 52$ 、男性9人、女性43人、平均年齢69.9歳、 $SD = 4.95$ ）を対象に検討した【研究2】。その結果、「世代性」と「貢献に関する満足度」が3か月で有意に向上したことが示された。また質的な検討から、仕事をとおした人とのつながりからのネガティブな経験も捉えられた。しかしコミュニケーションを円滑に進めることができているのは、高齢者自身が対処できたことによるものであると、むしろ経験のある高齢者の強みが生かしているという認識につながった発言が目立った。

第2節では、宝塚市で行った社会調査（ $N=456$ ）から、生きがい就労以外の就労も含めて、社会活動をとおした発達について検討した【研究3-1】。その結果、就労は「アイデンティティ」と「世代性」の「個人的側面」のみとの関係が示され、社会参加活動は「アイデンティティ」、「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」のすべてとの関連が示された。

第3節では、宝塚市の社会調査のデータを使用し、発達の4つの変数すべてと関連が示された社会参加活動の参加有群（ $n = 299$ ）を分析対象として、「交流の広がり」、「仲間の獲得」、「つながりからの学び」と発達の4つの変数との関連を検討した【研究3-2】。その結果、「交流の広がり」は「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」の「社会的側面」の発達のみとの関連が示され、「仲間の獲得」は「世代性」と「コミュニティ感覚」との関連、「つながりからの学び」は「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」の3つの変数との関連が示された。就労と社会参加活動の交互作用は有意でなかったが、社会的側面の発達という視

点から見ると、就労だけではなく、社会参加活動も同時に行うことが効果的である可能性が示唆された。

第4節で【研究2】と【研究3】をまとめる。就労と「社会的側面」の発達との関連は、【研究3】では有意ではなかったが、【研究2】では「貢献に関する満足度」が有意に向上したことから、就労の種類によっては、「社会的側面」の発達にもつながる可能性が考えられる。

第7章 社会活動をとおした発達モデルの検証【研究4】

本章では、「交流の広がり」、「仲間の獲得」、「つながりからの学び」、発達の4つの変数の関係について明らかにする。

第1節では、宝塚市の社会調査のデータ使用し、社会参加活動の参加有群 ($n = 299$) を対象として、「交流の広がり」がもたらす発達が「つながりからの学び」によって促進されるかについて、Sobel検定(Sobel, 1982)を使用し、検討した【研究4-1】。その結果、「世代性」は「つながりからの学び」が生じることで促進することが明らかになった。「社会貢献意識」は「つながりからの学び」の影響もあるが、「交流の広がり」のみでも高まる可能性が示された。「アイデンティティ」と「コミュニティ感覚」は、「つながりからの学び」の影響は非有意であったことから、「つながりからの学び」はなくても多様な人との交流で高まる可能性が示された。

第2節では、社会調査のデータから社会参加活動の参加有群 ($n = 299$) を対象にして、【研究1】の結果で示された、仲間の存在が「つながりからの学び」を促進するかについて、「交流の広がり」から「つながりからの学び」の影響における「仲間の獲得」の媒介効果について、Sobel検定で間接効果を検討した【研究4-2】。その結果、部分媒介が示され、仲間の存在は「つながりの学び」を促進するが、多様な人との交流も「つながりからの学び」につながることを示された。

第3節で、「つながりからの学び」の発達への影響についてまとめる。【研究4-1】では、社会参加活動をとおした多様な人と交流することは発達につながるが、「世代性」と「社会貢献意識」は「つながりからの学び」があることによって促進されることが明らかになった。「世代性」は、本論では「個人的側面」の発達と捉えているが、貢献行動につながる意欲である利他的行動意欲との関連が指摘されている (McAdams & de St. Aubin, 1992) ことから、社会活動への継続的な参加により、社会にもたらす効果につながることを考えられる。さらに「つながりの学び」は仲間によって促進されることが【研究4-2】で示されたことから、活動における仲間づくりは社会貢献につながる意識や意欲の高まりにつながる可能性が示唆される。

第8章 総合考察

本章、第1節では、本研究で得られた知見をまとめ、知見をふまえて「社会活動をとおした高齢者の発達モデル(理論モデル)」を提示する。社会活動をとおした人とのつながりは、交流だけの弱いつながりと、仲間や友人という強いつながりの2種類あることが明らかになった。理論モデルでは、弱いつながりから「弱いつながりからの学び」が生じ、活動継続によって仲間や友人という強いつながりがうまれる。強いつながりからは「強いつながりからの学び」が生じ、「強いつながりからの学び」が発達につながる。しかし必ずしも強いつながりを得なければ発達につながらないわけではなく、「社会活動をとおした高齢者の発達モデル(理論モデル)」では、弱いつながりだけでも発達につながる道筋と、「弱いつながりの学び」が生じることに

よる発達につながる道筋もあることを示した点である。このモデルからいえることは、活動における仲間づくりの取り組みは効果的であるが、一方で仲間ができなくても人との交流がある活動へ参加することで高齢者の発達は期待できるということである。

第2節では、本研究の理論的、社会的貢献について述べ、研究の限界と今後の展望について述べる。理論的貢献では社会活動において人とのつながりを持つことは、高齢者の学びにつながり、学びが発達をもたらす可能性について社会老年学で示した点である。また、社会にもたらす効果という視点を取り入れた発達を検討し、社会貢献につながる発達に学びが重要である可能性を実証的に示し、生涯学習や発達の研究にも検討の必要性を示したといえる。また、社会的貢献については、社会活動の種類によって学びに違いがあることや、何らかの活動へ継続し続けることが重要であることを示し、国や自治体の社会教育に対する支援に関する有益な情報になり得る知見を示した点である。

しかし本研究では、調査および分析において対象の偏りがあり、研究結果を一般化するのは難しく、今後の研究課題である。また本研究では高齢者の「社会活動をとおした学び」について、人とのつながりからの学びと発達という視点における理論モデルを示したが、今後は地域や社会等、つながりの視点を増やし、モデルの発展を目指したい。

(注) 3,000～6,000字（英語の場合は1,000～2,000語）でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏 名	三 浦 知 陽		
論文題目	社会的つながりがもたらす高齢者の学びと発達		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	片 桐 恵 子
	副 査	教 授	長 々 原 誠
	副 査	教 授	加 藤 佳 子
	副 査	准教授	勅使河原 君江
	副 査	帝京大学 准教授	森 玲 奈
要 旨			
本審査委員会は、三浦知陽氏から提出された博士論文について審査し、次のような結果を得たので報告する。 本研究は高齢者の主な活動である社会参加と就労を社会活動としてまとめ、社会活動を通じて人とのつながりを形成することで学びと発達がもたらされるかということに注目している。具体的には「社会活動をとおした学び」とはどのようなものか、個人と社会の発達という観点から、社会活動は発達を促進するか、社会活動における「つながりからの学び」は発達に影響するのか、を実証研究の結果から検証し、その結果を踏まえて、「社会活動をとおした高齢者の発達プロセス（理論モデル）」を提案した。 博士論文は8章で構成されていた。 第1章では研究の背景として、超高齢社会における社会活動の現状と課題が示され、これらの活動を高齢者の社会活動としてまとめて扱う意義を説明した。 第2章では、Jarvis(2010)の学びの分類から、経験から偶発的に生じる学びであるインシデンタルラーニングに注目し、高齢者の社会活動をとおしたインシデンタルラーニングを「社会活動をとおした学び」とし、社会活動の効果と課題を整理した。「社会活動をとおした学び」の内容の検討、活動の種類による違いの検討、「つながりからの学び」がもたらす発達に関する検討の3つの不足について指摘した。 第3章では、生涯発達に関するエリクソンなどの先行研究から、社会活動をと			

おした高齢者の発達について整理し、発達につながる学びという視点の不足、高齢者の発達が個人と社会の両面にもたらす効果の検討の必要性を論じた。

第4章では、先行研究からの知見を踏まえ、「社会活動をとおした発達のプロセス（仮説モデル）」を提案した。これは高齢者が社会活動により「人とのつながり」を獲得し、それにより「つながりからの学び」が生じ、高齢者の発達がもたらされるという、社会活動で得られる人とのつながりと学びを発達までのプロセスとして捉えたモデルである。

第5章は、社会活動参加者へのインタビュー調査の分析から、活動の種類により強いつながりと弱いつながりが生じ、異なる学びが生じることを明らかにした。

第6章では生きがい就労の参加者に対するインタビューと縦断調査、および宝塚市でのランダム調査により、社会活動をとおしてつながりが生じ、つながりから学びが生じていたことを、質的研究と量的研究を組み合わせたミックスメソッドにより、明らかにした。

第7章では、宝塚市でのランダム調査のデータを用いて、社会活動への参加から人々のつながりを経て学びが生じるというプロセスを、媒介分析により示した。

第8章では、研究結果から仮説モデルを修正し、「社会活動をとおした高齢者の発達プロセス（理論モデル）」を提案した。本研究の理論的貢献としては高齢者の社会活動の効果として殆ど検討されてこなかった学びと発達について、個人的側面と社会的側面への効果から実証的に検討したこと、学びと発達が生じるプロセスを明らかにしたことである。社会的貢献としては、本研究の知見が高齢者にも学びと発達が生じるというステレオタイプを打破に貢献しうるものであり、新たな高齢者の可能性を指摘したこと、学びと発達が生じる条件を明らかにし、社会的実践への示唆を与えたことにある。

以上を踏まえ、博士論文の5つの評価基準である、「独創性」「専門性および学術性」「実証性」「論理性」「先行研究・資料の適切・厳密な取り扱い」を充足していることが確認できた。

学位申請者は、2022年7月には、日本老年社会学会第64会大会において「社会活動は高齢者の「世代性」を高めるのか？」について、優秀ポスター賞を受賞している。また、筆頭著者として本論文に直接関わる下記のレフェリー付き学術論文2編を発表しており、博士学位申請に関わる参考論文等の要件を満たしている。

1. 安里知陽, 竹内真純, Kim Nahyun, 片桐恵子 (2022). 高齢者の社会参加における学習効果 : 活動団体の種類による比較. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 15(2) 67-78
2. 安里知陽, 片桐恵子 (2022). 介護施設における生きがい就労の効果と課題 : 3か月の体験就労による変化. 老年社会科学 44(3) 256-268.

本研究は、これまでの社会老年学において、もっぱら健康寿命の促進という観点から注目されてきた社会参加活動と就労という社会活動について、生涯学習理論、生涯発達理論を踏まえた上でそれを統合・発展させた新たな「社会活動をとおした発達のプロセスモデル」を提案し、インタビュー調査、社会調査、縦断研究を自在に組み合わせたミックスメソッドにより多面的に検証した。高齢者にも学びと発達が生じること、社会活動の種類による異なる学びがあること、学びには個人的側面と社会的側面の発達があり、高齢者の学びは社会にもプラスの影響があること、学びが生じる要因として人々のつながりがあることの重要性を指摘し、超高齢社会における高齢者の新たな可能性について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の三浦知陽は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。